展評

永津 禎三

安次嶺金正展－緑の抒情

鮮度持ち続ける絵画

戦後沖縄の美術界をリードした画家、安次嶺金正。彼の作品は、その豊かな絵画性と絶妙なヴァルール（色価）の合わせ方ゆえ、その真価は図版では捉え難い。没後20年に開催された本展は、じかに安次嶺作品に対峙できる、まさに待望の展覧会である。

安次嶺の画業については、戦後の世相をよく映し出した『群像』（1950年）や、色面空間の実験性に富む『ばなな』（54年）、『初夏』、『薫風』（55年）などが代表作であり、60年代以降の緑色を主調とした作品は、瀟洒な表現が他の追随を許さない境地に達するものの、さほど大きな変化なく継続された、とするのがこれまでの通説であっただろう。

しかし、2009年に開催された「移動と表現」展で元米兵や軍属の方々の所蔵する作品が里帰りし、その中に安次嶺の風景画小品3点があり、そのみずみずしい表現に驚かされた。1948－50年に制作されたこの3点の風景画は、それぞれセザンヌ、ボナール、マティスの影響を感じさせ、そのみずみずしさゆえに、後に描かれた『群像』などがアカデミックな外光派のように見えてしまう一種の逆転現象を引き起こした。さらに、木々の葉の描法に顕著なように、緑の絵画に先行して既にその様式をも内包している。

これらの里帰り作品を含めて画業を通覧したとき、安次嶺作品はどのように捉え直すことができるのだろうか。これが、本展を見る以前の期待であった。

ところが、この期待は良い意味で見事に裏切られ修正を迫られた。私にとって初めて見ることになった、晩年の89、90年の作品、十数点の出現である。

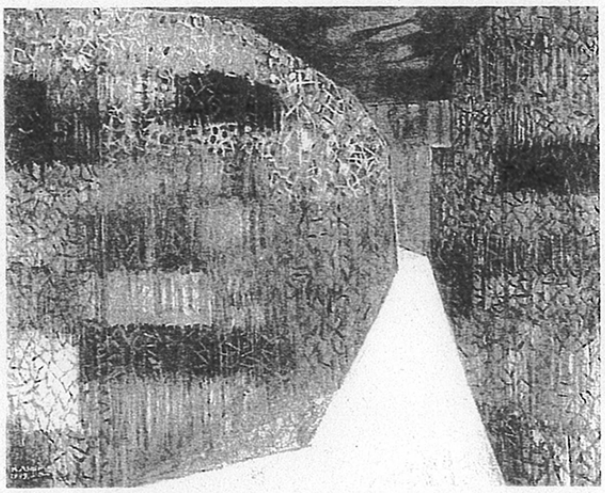
まず、感銘を受けたのが『村への道』（89年）である。66年制作の作品の上から加筆され、装飾性と色面の空間性が吟味され、道の形態が慎重に決定し直されている。

82年発行の『安次嶺金正画集』を確認したところ、これに掲載されている作品のうちこの『村への道』を含め12点もの作品が後に加筆されていると分かった。また、『仏桑華』は、緑の森の作品が天地逆にされ、赤い花が画面全体に散らばるように不思議なスケールで描き加えられている。このようなスタイルは80年代のニューペインティングの影響と思われ、これが66年に描かれたとはまず考えられない。『黄色の仏桑華』と共に、上書きされた署名に制作年は記されていないが、85－89年頃の制作年と推察できる。

このように、晩年の大作の大半が60－70年代の作品に筆を加えた、さらなる探求の成果である。89年頃の安次嶺に何が起こったのであろう。老画家が自身の絵画の課題に真摯に向き合い、決着をつけようと臨んでいる…そんな姿が思わず目に浮かぶのである。安次嶺の絵画の課題は過去のものではない。作品群は大変な鮮度を持って、今、私たちに迫ってくるのである。

（琉球大学教授）

◇「安次嶺金正展－緑の抒情」は県立博物館・美術館で27日まで。



安次嶺金正『村への道』（1989年7月）